

# がんセンター 便り

 宮城県立がんセンター地域医療連携室



## ゲノム医療について

研究所発がん制御研究部長 やすだ 安田 じゅん 純



がんはこの数十年の研究から「ゲノムの疾患」という考え方が定着しました。30 億塩基対のヒトゲノム中に、がんを引き起こすような遺伝子異常が発生し、浸潤・転移能の獲得や、治療抵抗性を示すことがその本態です。がんを引き起こす分子の機能解析から、その標的薬剤が大きな治療効果を示すことがわかってきました。また、一部のがんではゲノム異常の高度な蓄積を引き起こします。最近開発された免疫チェックポイント療法は、がんゲノム異常の蓄積した症例で有効性が高いという証拠も得られてきています。これらのことから、がん細胞のゲノムを分析することで、より合理的な治療に結びつくことが期待できます。今年度から厚生労働省は全国の病院を「がんゲノム医療中核病院・連携病院」として指定し、がんゲノム医療の提供体制の整備を開始しました。当センターは中核病院である東北大学病院と連携する「がんゲノム医療連携病院」として指定されたので、今後宮城県における「がんゲノム医療」の実現のために必須の役割を果たしていくことが求められます。

一方で、ゲノム解析は高額であるにも関わらず、現状では必ずしもすべての患者さんに特効薬が見つかるわけではなく、多くの患者さんにはいわゆる標準治療が有用である、という結果が出るものと予想されます。今後、がんのゲノム医療をさらに推進するためには、薬剤選択だけではなく、がんの遺伝子異常の情報を活用したリキッドバイオプシー（血液でのがんゲノム診断）の研究開発や、遺伝子パネル検査結果の利活用のためのデータベース整備など、新規分析技術の開発が必要です。特にリキッドバイオプシーはオーダーメイドの腫瘍マーカーとして、患者さんにとって利益の大きな技術開発だと信じています。

また、ゲノムという言葉は多くの患者さんやご家族にとってとっつきにくい面もありそうです。ゲノム解析について、センターとして丁寧に説明し、内容をご理解いただくための教材や資料の作成などもしっかり進めてまいります。今後分子標的薬剤が増加し、研究が進展することでゲノム医療が日常診療として定着し、多くの患者さんにさらなる利益がもたらされるものと思います。

# がんセンター25周年と 記念式典のお知らせ

副院長 まつうら 松浦 かずと 一登



当センターの歴史をひも解くと、昭和35年に成人病対策の一環として成人病センターの建設が計画され、1967年(昭和42年)4月に6科50床(内科、外科、婦人科、放射線科、眼科、耳鼻咽喉科)の宮城県成人病センターとして開院されました。その後、増え続けるがん患者対策として県知事に「がんセンターの整備に関する意見」が具申され、成人病センターから衣替えする形で1993年(平成5年)に研究所を併設した宮城県立がんセンターが誕生しました。内科(循環器科含む)、呼吸器科、外科、婦人科、放射線科、耳鼻いんこう科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、麻酔科を擁する308床の病院として診療を開始しています。1995年(平成7年)には358床へと増床し、2002年(平成14年)には緩和ケア病棟(25床)での診療が開始されました。現在、24科600名弱の職員で宮城県ならびに東北地方のがん患者さんのため、治療と研究に精力を傾けています。2006年(平成18年)には東北大学附属病院と並んで都道府県がん診療連携拠点病院に指定されています。2011年(平成23年)には宮城県立病院機構が設立され、県立3病院(県立がんセンター、県立精神医療センター、県立循環器・呼吸器病センター)が束ねられ、地方独立行政法人化しました。2013年(平成25年)には検査(PET-CT)、治療(トモセラピー：強度変調放射線治療専用機)と外来化学療法室を有する集学治療棟が完成し、稼働しはじめました。様々な変革を経て今年のがんセンター設立から丁度25年になりました。

こうした歴史の重みを感じつつ、関係各位のご支持とご助力に感謝を示し、これからのがんセンターの夢を披露する記念式典を以下の予定で開催します。皆様のご参加をお待ちしています。

日 時 平成30年10月13日(土) 15時～受付開始  
場 所 江陽グランドホテル

第1部 記念式典(15:30)

第2部 講演会 兼 地域医療連携の会

I 講 演(16:00)

- 1) 宮城県立がんセンター研究所長 島 礼
- 2) 宮城県立がんセンター総長 荒井 陽一

II 記念講演(17:00) 国立がん研究センター理事長 中釜 斉 先生  
「日本におけるがんゲノム医療の実装と展望」

第3部 祝賀会(18:15)

# 栄養管理はがん治療の基本です!!

管理栄養士 <sup>さ さ き</sup> 佐々木 めぐみ

栄養管理室は栄養管理室長（頭頸部外科医師）、副室長（消化器外科医師）、3名の管理栄養士で構成され、平成29年度6月からは内1名が栄養サポートチームの専従管理栄養士として活動しています。当院では、入院時に患者の体重減少の有無や食欲不振など栄養状態の評価を行い、リスクがある患者には栄養サポートチーム(NST)が介入しています。昨年度はのべ960名の患者に介入しました。主治医や看護師からの依頼も増加傾向にあり、頭頸部がんなど、経口摂取に影響する可能性が高い治療を行う場合は、治療開始前から介入しています。今後は支持療法チームなど他のチームと連携しながら、より多くの患者の栄養サポートに携わっていきたいと考えています。

がん患者では、治療によって食べられなくなり体重減少をきたすことがしばしばみられます。体重減少といった栄養状態の低下は、治療の効果や予後にも影響すると言われていています。つまり、栄養管理はがん治療の基礎であり、重要な支持療法のひとつと言えます。当院では、食事に関する困りごとに対して入院外来問わず、管理栄養士が面談や栄養指導を実施しています。特に、胃がん術後の患者については、PGSASアプリという問診票を使用し、個別に胃切除後障害を評価しながら退院後も継続的に指導しています。このような取り組みについては、胃外科・術後障害研究会や日本静脈経腸栄養学会でも発表しており、学会活動にも積極的に取り組んでいます。

また、がんの治療では、嘔気や味覚異常など食事に影響する副作用が多く、なかなか食事がすすまないことがあります。少しでも口から食事を摂ってもらうため、食べられそうなものを配膳する『のだ山食』など、がん治療に特化した食事の対応をしています。その他、季節や行事に合わせた行事食を年間34回行い、大変好評を得ています。さらに、今年度は患者の要望を少しでも食事に反映させるため、約束食事箋を大幅に見直しました。6月からは、少量の食事を小さい食器に盛り付けた『ちょびっと食』など新たな食事にも対応しています。

今後も一人ひとりの患者に合わせた食事提供や栄養管理を行い、栄養の視点から患者さんの治療をサポートしていきたいと思います。



向かって左より  
上段 佐藤 高梨 佐々木  
下段 佐藤医師 松浦医師



ちょびっと食



七夕

# お知らせ



平成30年7月6日付で、病院機能評価における審査の結果、一般病棟・緩和ケア病棟とも継続認定されました。

3rdG: Ver.1.1 主機能  
3rdG: Ver.1.1 副機能



## 外来新患診療体制表

平成30年8月現在



(宮城県立がんセンター)

診療科	曜日	月	火	水	木	金
血液内科		●	●			●
腫瘍内科		●		●		
呼吸器内科		●	●	●	●	●
消化器内科		●	●	●	●	●
頭頸部内科				●		
緩和ケア内科				●		●
呼吸器外科				●		●
消化器外科			●	●		●
乳腺外科	●				●	
整形外科			●		●	●
形成外科			●			●
脳神経外科	●			●		●
泌尿器科	●			●	●	
婦人科	●	●	●		●	●
頭頸部外科	●	●	●		●	
放射線治療科	●	●	●	●	●	

診療受付時間：午前8時30分～11時00分 TEL 022-384-3151 (代) FAX 022-381-1169 (地域医療連携室)



### 交通案内

**J 桜交** 東北本線名取駅下車、バスまたはタクシーを利用  
**R 南交** 名取駅西口から「県立がんセンター線」(なとりん号)を利用  
**自家用車** 名取駅西口から「北目上原線」(なとりん号)を利用  
 仙台南インターからは、国道286号バイパス經由  
 県道仙台・岩沼線を利用 (所要時間約15分)

### 地域医療連携室のご案内

地域医療機関の先生方からご紹介を受けた患者さんの診療予約をお取りしてスムーズな受診ができるようにしております。

- 受付 午前8時30分～午後5時15分
- TEL (022) 381-5152 (直通)
- (022) 384-3151 (代) 内線123
- FAX (022) 381-1169 (地域医療連携室)

**宮城県立がんセンター**  
 〒981-1293 宮城県名取市愛島塩手字野田山47の1  
 電話(代表) (022) 384-3151 FAX(企画総務課) (022) 381-1168

ロゴマークの3本の柱は「治療、予防、研究」を、上の「まる」は患者さんを表わしています。3本の柱が、患者さんを支えるという意味です。